

2019年度第1回アクティブ・ラーニング研究会：一般社団法人アクティブ・ラーニング協会「第10回アクティブ・ラーニングフォーラムin埼玉」

著者	斎藤 伸
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.29
号	No.1
ページ	39-40
発行年	2019-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00003745/

聖学院大学総合研究所 アクティブ・ラーニング研究会 FD・SD委員会 共催
 2019年度第1回 アクティブ・ラーニング研究会
 一般社団法人アクティブ・ラーニング協会
 「第10回アクティブ・ラーニングフォーラム in 埼玉」



会場の様子

2019年8月23日（金）、聖学院大学上尾キャンパスのチャペルを会場として、2019年度第1回アクティブ・ラーニング研究会が開催された。本研究会は、一般社団法人アクティブ・ラーニング協会主催（株式会社Findアクティブ・ラーナー共催）の「第10回アクティブ・ラーニングフォーラムin埼玉」との共催という初の試みであった。参加者は本学の教職員12名、現職の中学・高等学校の教員を中心とする一般の参加者91名であった。

講演者には、西川純氏（上越教育大学教授）、中島博司氏（茨城県立並木中等教育学校校長）、棚谷克彦氏（茨城県立結城第一高等学校教諭）、野澤宏光氏（栃木県立黒磯南高等学校教諭）の4名をお迎えし、約5時間にわたって先進的な教育の理念およびその実践を紹介していただいた。本報告では紙幅の都合から、西川氏と中島氏による講演の要旨をまとめたい。

最初に登壇した西川氏の講演は「アクティブ・ラーニングとは何か？ know-howではなくknow-why」と題し、今後、人口が減じていくわが国で生き抜くために求められる人間関係の構築が、高等学校までになされるべきであることがさまざまな事例にもとづいて指摘された。中川氏によると、かつて中教審の答申に盛り込まれた「アクティブ・ラーニング」の概念には、固定的で、明確に限定

された定義が存在するわけではないので、それは各教員の想いに応じて変形させる余地がある。よく言われる人工知能（AI）による人間的行為の代替は、たしかに止めることはできないし、止めるべきでもない。しかしながら、それによって代替され得ない領域が必ず残されるのであって、西川氏によると、それこそが人と人との「つながり」である。AIが得意とする知識（データ）の収集・蓄積を主とした受動的な学習ではなく、そうした「つながり」を構築して生き抜くための能力が養われねばならない。これからの時代に求められる学校は、そうしたつながり、友人・知人とともに「人生100年の時代」を最後まで生き抜く能力を育成する場であり、そのために用いられる手法がアクティブ・ラーニングであると講演者は主張する。特定の職業に就いた後に得た友人・知人は、大抵の場合はそれと同種か、または関連・隣接する職にある。そうすると、それらの人たちは失業・失職のリスクを共有する人たちであり、「もしもの場合」に共に生き抜く仲間とはなりにくい。これからの学校に求められるのは、さまざまな背景をもち、さまざまな価値観をもった隣人を見つけ、そうした人たちと共に生きることができると西川氏は主張する。

次に登壇した中島博司氏は、「探究につながる<アクティブ・ラーニング>R80 TO学習 AALの活用」と題して、中高一貫校での実践にもとづく持論を展開した。ここでは最初に二つの問い、すなわち①「今なぜ<探究>なのか」、②「今なぜ<アクティブ・ラーニング>なのか」を参加者同士で考えることからスタートし、新たな学習指導要領においては「主体的・対話的で深い学び」とされるアクティブ・ラーニングがなぜ必要であるのかが問われた。中島氏によると、アクティブ・ラーニングにおいて重要なことはその手法であるよりも、むしろその目的、すなわち生徒・学生自身が「アクティブ・ラーナー」となることである。それは

先に登壇した西川氏が指摘したように、これからの予測が困難な時代にあつて、その都度に学び続ける「生涯学習者」の育成に等しい。そうしたなかで中島氏が打ち出したアクティブ・ラーニングのメソッドがR80（アール・エイティ）と、TO（Teaching Others）、そしてAAL（Art Active Learning）である。R80とは、授業の最後にその単元内容を80文字以内でまとめる作業を指しており、生徒自身が学びを再構築することで定着を図る。そしてTOは、中学・高校の一貫校ならではの取り組みであり、おもに上級生が下級生に対して指導を行うことで、知識のアウトプット、ならびにコミュニケーション能力の向上が期待される。先輩が後輩に指導することはビジネスの場では極めて日常的に行われているにもかかわらず、学校の教学においては稀である。そのため、「縦割りのペアワーク」による学びの重要性、および必然性が指摘された。そして最後に芸術の領域で行われるAALもまた独特で、計算や論理的思考ばかりでなく、芸術的な感覚、すなわち「右脳のな」感性、創造性が強調される。それはSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定されている同校にとって、いわゆる「文系」・「理系」の垣根を越えた全人的な学びとして特徴的であるように思われた。講演者によると、アクティブ・ラーニングの積極的な取り組みは学力の向上にも寄与しており、それが最終的に進学実績として反映された。

最後に、本研究会全体としておよそ5時間という長時間にわたる研修会であったが、参加者同士が特定の問いに関して1分間で話し合うペアワークや、R80をはじめとするアクティブ・ラーニングの手法を実際に体験することができ、教育者・被教育者、双方の観点からこれからの教育のあり方を考えることができた。また、本研修会を通して何度か言及された、「置換力」を意識することで、そのままでは自分自身の立場に妥当しない事柄でも、常にそれをわが身に置き換えて応用可能性を考える、「主体的インプット」の時間となった。

（報告者：齊藤伸 [さいとう・しん] 聖学院大学基礎総合教育部特任助手）

本

書籍のご案内

お近くの書店、Amazon.co.jpからお買い求めいただけます。

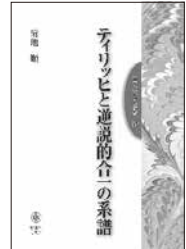
聖学院大学研究叢書10

テイリツヒと逆説的合一の系譜

菊地 順 著

2018年6月25日発行
8,500円（税別）

テイリツヒは、神と人間との
〈逆説的合一〉の深みから、
〈存在の勇氣〉を語る。



ベイズの誓い

——ベイズ統計学はAIの夢を見る

松原 望 著

2018年6月20日発行
3,200円（税別）

AIの元祖・ベイズ統計学の基礎から最新の応用までを学ぶ。



デジタルの際

——情報と物質が交わる現在地点

河島茂生 編著

2014年12月25日発行
2,000円（税別）

デジタル化し、脱物質化する現在、我々の社会や心理、身体のありかを問う。



健康科学

ヘルスプロモーション

和田雅史・齊藤理沙子 著

2016年2月29日発行
2,500円（税別）

人を取り巻く環境への働きかけをも
目標とする「ヘルスプロモーション」
に基づく健康科学を解説。



聖学院大学出版会 TEL:048-725-9801 FAX:048-725-0324
URL:https://www.seigpress.jp